

対談

岡眼科クリニック 岡義隆 院長 × 聖母眼科病院 李京憲 院長



先進的な眼科医療を提供している「岡眼科クリニック」(福岡県飯塚市)の岡義隆院長と、韓国有数の眼科病院「聖母眼科病院」(釜山市)の李京憲院長が2月9日、福岡市のホテルで対談しました。共に眼科先進医療の積極的な導入姿勢が通じ合い、この日提携協定を結んだ両氏は、関心の高い医療技術の他、地域医療への貢献やアジアの医療サービス向上に対する思いなどを語り合いました。司会は産業医科大学眼科学教室の近藤寛之教授。



聖母眼科病院 院長 李京憲氏

イ・ギョンホン 1974年、韓国カトリック大学校医科大学卒業。93年、同大学医科大学大学院修士課程(眼科学)卒業。

岡眼科クリニックでの手術の様子

FSレーザーの情報共有は重要

先端医療を地域へ、アジアへ

高度な手術に身震い

近藤 初めに、それぞれの病院の特徴を紹介ください。

李 聖母眼科病院の開院は1988年です。2013年の外来患者は18万人。手術の内訳は白内障約5200例、レーシック3千例など計約9千例で、この実績は大学病院を含む韓国内の医療機関ランキングで2、3番目です。1997年にはアジア初の有水晶体眼内レンズ手術を成功させるなど、屈折矯正手術でアジアをリードしています。

岡 岡眼科クリニックは2009年、厚生労働省によって筑豊地区で唯一の眼科先進医療実施機関に認定されました。力を入れていた白内障の「多焦点眼内レンズ手術」は、13年の症例が390例と全国トップクラスです。

近藤 多焦点眼内レンズがどんなふうに進歩的かを説明ください。

岡 従来の白内障手術は、主に加齢で濁った水晶体を取り除いた後、近くだけあるいは遠くだけがよく見える「単焦点レンズ」を入れます。多焦点レンズは近くと遠くの両方に目のピントを合わせる



岡眼科クリニック 院長 岡義隆氏

おか・よしとか 1996年、愛知医科大学医学部卒業。福岡大学病院、同大学筑紫病院、聖マリア病院に勤務後、2002年に岡眼科クリニックを開業。近く福岡市内に分院を開設予定。日本眼科学会認定眼科専門医。

新技術から良いものを見抜くのがプロ

ため、単焦点の弱点をカバーできます。ただ、特殊な見え方なので脳の画像処理能力が追いつかず、視力が出ているのにぼやける、夜は光がにじむといった見え方の人が数パーセント出ます。その不応への対処は難しく、先進医療認定の医療機関しか手術できません。将来は主流レンズになる見通しですが、国内の普及率はまだ1%未満です。

近藤 李先生の病院は現在、どんな治療法に積極的に取り組んでおられますか。
李 フェムトセカンド千兆分の1秒、FSレーザーというレーザーをメスの代わりに用いた白内障手術です。挿入する眼内レンズの精度が上がること、手術に求められる精度も上がりました。最先端の機器はその要求に応えることができ、しかも施術者の腕の優劣によらない安定した治療成績が望めます。

ソフト面の学び合いも
近藤 お二人は、地域医療への貢献をどんな形で進めたいですか。
李 韓国医療の中心はソウルですが、私は「目の病気だけは釜山の人がソウルへ行かずに済むよう、最上の医療を提供しよう」という信念で開院しました。その実現には最新機器と先進技術の導入が不可欠で、この25年間、それを貪欲に続けてきました。

岡 国内外とも医療の発展スピードは驚くべき速さですが、新しい技術や機器が全て良いとは限りません。その良しあしをプロとして見抜き、高度で優れた技術は積極的に取り入れ、大都市にも引けを取らない医療を地域の患者さんに提供してきました。その方向性は今後も変わりませんが、私は「目の病気だけは釜山の人がソウルへ行かずに済むよう、最上の医療を提供しよう」という信念で開院しました。その実現には最新機器と先進技術の導入が不可欠で、この25年間、それを貪欲に続けてきました。

近藤 新しい医療技術への積極的な取り組みは、両院共通ですね。今回の姉妹提携の狙いや思いをお話してください。
李 岡先生はより良い医療を提供したいという情熱にあふれ、私の若いころを思い出します。両病院の医療情報や技術の共有は、さらに質の高い医療提供につながるでしょう。

岡 医療技術の共有についての具体的な話をしましょう。両院とも備えているFSレーザーの機器は米国製で、欧米人仕様です。アジアの患者さん向けにどんな工夫ができるかなどのノウハウを、ぜひ交換したいです。また、李先生

先端医療のデータやノウハウ共有 提携協定に調印



岡眼科クリニック(岡義隆院長)と聖母眼科病院(李京憲院長)は、2月9日、福岡市博多区のホテルオークラ福岡で提携協定の調印式を行いました。高度医療などの技術交換など連携を密にすることを確認しました。

両院は、白内障の手術でメスの代わりにするFSレーザーという超高精度の治療機器を導入しており、この先端医療をはじめとする医療ノウハウや技術データを共有することで、お互いの治療成績をさらに向上させたい考えです。また、職員研修などで交流し、スキルアップやサービスレベルの向上も目指しています。

調印式では、日韓から出席した約80人を前に岡院長が「最先端医療をアジアへ広く提供していく思いで、われわれは通じ合っている」とあいさつ。李院長は「両院の親善と友愛を固め、医療サービスをさらに高めていきたい」と語り、握手を交わしました。

李 うちの病院はベトナムに眼科を設立するなど、ベトナムの眼科レベルの底上げに尽力してきました。今後は先進医療も広め、ベトナムの医療水準を一層高めていきたいです。



▲岡眼科クリニックの外観



産業医科大学 眼科学教室教授 近藤 寛之氏

アジア貢献、原点はボランティア

日本の技術を生かしたい

岡義隆院長

アジアの眼科医療に貢献したいと話す岡眼科クリニックの岡義隆院長。その原点は、大学卒業後の福岡大学病院勤務時代以来、今も続ける海外ボランティアにあるといいます。

インドやバングラデシュなどで白内障手術をボランティアで行っているNPO法人「Project Operation Sight for All(全ての人々のための視覚手術計画)」/略称POSAの活動を知った岡院長は、一つの疑問が頭から離れませんでした。日本では誰でも治せる白内障がなぜ、発展途上の失明原因のトップなのか。「現地で実情を見たい」

まず赴いたインドの「アイキャンプ」では、1週間で100人を診る予定でした。ところが、その5倍も人であふれ返っていました。当時のインドでは福祉施策の遅れもあり、失明は生存をも脅かす状況だったといえます。

そんな現状を目の当たりにし、岡院長はかげんとなします。「私たちがもう疲れたからと100人の治療で切り上げたら、残りの400人のうち1年で何人が亡くなるのか」。体力と時間の許す限り対応したのでした。

岡院長は「医療レベルの高い日本の眼科技術が役に立つ場所は、アジアにまだまだたくさんある」と話します。今年はバングラデシュへ行く予定だそうです。